

第3回高齢者福祉計画・介護保険事業計画策定委員会会議記録

○日時 令和5年12月19日午後1時30分～

○場所 高森町役場 3F 大会議室

1 開会

2 協議事項

(1) 高齢者の健康の現状と課題について

- ・事務局から別紙資料」で説明

(2) 介護予防について

- ・事務局から別紙資料」で説明

(3) これから重点的に取り組むべきこと

(松村委員)

・シニアクラブでも、いつかは介護を受けるような年代になってきているが、本当に介護が必要になったときなどに、町ではどういうことをしてくれるか、どこに相談に行ったらよいかということが話題に出る。こういうことが高齢者に伝わっていない。介護が必要になったときにどうすれば良いか高齢者に伝わっていない。どうなるのだろうという不安もある。その辺の取り組み、制度などを高齢者にもっとPRして伝えてほしい。

(渡辺委員)

・健康センターで運動を指導している。指導できるスタッフの人数には限りがある。専門的とまではいなくてもある一定程度ラインの指導ができる運動リーダーとなるようなボランティアが必要ではないか。近くの公民館でなら参加できるという人も多くいるのではないか。そういうことに参加できる場合は、人とのかかわりということで大切。各団体だけでなく町が主導して、指導にまわれるような体制ができると良い。運動する人ばかりではなく、運動しない人がいかに運動するようにするかが課題であると感じている。

(福澤委員)

・高齢者の日常で困っていることへの関わりが必要。地域のサロンに行くと困りごとがわかる。多くの方が心配事を抱えている。

・さわやかネットワークでもいろいろなサロン研修、サロン交流会を開催している。地域のサロンは地域の力が発揮される場でもある。地域のリーダー人材という視点が大切。そのことがボランティアにつながっていく。

- ・全町サロンができれば住民の声が発せられる。サロンを町の体制に組み込んでほしい。

(大洞せい委員)

・新田地区の取り組みを説明。年8～9回実施している。利用人数減り気味。最近ではクリスマスのサロンでは育成会と一緒に子供会、お年寄り一緒に交流した。困っている方をどうするというよりもお楽しみ会としての傾向が強い。お助けマンが10人ほどで行っている。お助けマンと地区の役員の関係が繋がればよい。

(堀竹委員)

・母が介護でお世話になった経験から、ケアマネージャーと主治医の連携がよかった。困ったときにも入浴サービスを取り入れてくれたりして、こういうときはこういうところと連携して、それにあった対応ができるということが大切。それぞれの連携が大切と感じる。

・災害のときに寝たきりの人をどう避難させたらよいか悩んだ。会所に連れていったらよいのか判断することも難しいということもありそういうことを検討して行ってほしい。

・おむつの補助を母の介護でいただいた。それ以外にも配食サービスもあると思うが、できるだけそういう補助をしていただければ介護するうえでありがたいと思う。

(滝沢委員)

・地域サロンの活動は大切。地域によっては80から90代になっても現役で働いている方が多い地域もある。農業など現役で頑張っている方の声を聞くことが必要ではないか。

・民生委員をしていた経験から地域の困りごとをつなぐ役をもっと活用してほしい。ボランティアは責任がないが、地域の役は責任もある。その方の活動をはっきり示した方がよいのではないか。お助けマンのような組織が崩れている。新しい組織をたちあげることも良いが前からの制度を拡張していくことが地域にあっている。

・出原ではお助けマンがつぶれそうになったが区長さんがいいことだから続けた方がよいといってくれたことにより続いている。消えないことが大事。その人がだめでも2年ごとに変わる。特定の人でなくても、できるときにできることをやれば長続きする。地区の役員は行政につなげることが大切。うちの母も包括センターや社協につながって助かった。困っているときになんでも相談することが大切。民生委員につながってさえいれば、たとえ行事に出てこなくても安心である。

(大洞千恵子委員)

・サロンを開催すると楽しかった、次も出たいという声が聞こえる。出れば楽しいが出ていくまでが難しい人もいる。サロンは女性が多いが、男女同じであれば良いと思う。地区の人が誘う、男の人が男の人を誘ったほうが良いのではないか。

(橋都委員)

・役員に男の人が多いと女性の声が届かないことが多い。少ないのは課題である。さきほ

どPR不足であるという意見も出ていた。一般の町民に思いを発信する力が必要という課題がある。地道な活動ではあるがそのとおりだと感じた。お年寄りの住みやすい町にしてほしい。

(細田委員)

・去年から看護教育課程で地域包括を理解する実習を1年生から入れている。暮らしている高齢者を支援するシステムが必要。介護予防にも3段階あり1次予防(病気にならない保健指導)、2次予防(早期発見・早期治療)、3次予防(悪化しないための関わり)がある。

・高森町は現役で働いている人が多い。保健師さんの二次予防の取り組みは必要。行政・施設任せにせず、地域の皆さんで何とかするという力があるということを感じた。そういうことを学生に伝えていきたい。

(平栗保健師)

・現役の方の健康づくりにつなげていきたい。健康を維持していくために体を振り変えるのには健診を受けるのがよい。その人に役割があるということが大事で、それが社会参加となる。健康であるということでも働いて行けることになるということ伝えていきたい。

(木村委員)

・生活支援コーディネーターは困っている人に対して地域で支える推進役。地域で何ができるか、困らないようにしていくには社会参加、住民主体の地域づくり、支え合いの体制づくり、ご近所どうしの支え合いを広める、地区にあった活動をしていくということになる。地区によってうまく活動をしているところとそうでないところがある。講演会をしたが興味ある人しか参加しない。各地域、隣組単位、近所の関係で助け合いができる活動を地道にやっていく。若い方から高齢者まで役割を持って活動していけるような環境になるよう活動していきたい。お隣ご近所が良い環境になるように周知していきます。

(筒井委員)

・あさぎりの郷で介護に従事しているが、要介護になるとそこから良くなる人は少ない。介護予防が大切と感じる。骨折は生活習慣が原因であることもある。要介護になる人を少なくすることが必要。地域での取り組みは必要。興味あることには行きたい。それに行ける、参加できる雰囲気が必要。

・地域の人たちと話していると災害のときに要介護の人をどう救助するか、常会に入っていない人をどうするかということが話題に出る。どう救助するかという体制が必要。

(中委員)

- ・施設利用者は今後も増えていくようであり、介護事業所として安定したサービスができるよう提供していきたい。介護人材の確保は、行政、圏域とも協力してやっていく必要があるが一番の課題である。
- ・高次脳機能、身体機能などリハビリサービスを充実させていきたい。通所リハビリに加え訪問リハビリを開始している。連携が大事。連携をして情報を必要とする人に情報が届くようにしていきたい。

(下田委員)

- ・この4月から報酬改定とかあるが、人材確保が一番。開業医が減る中、勤務医確保してこの状況をいかに確保していくかが課題。事業所だけでは限界があり、地域の皆さん、ご家族に介護技術を広めて教えていくことを重点的に考えていきたい。

(原委員)

- ・びすけっとの活動を紹介。サロンは定期的に利用すること、計画的にやっていくことが予防になる。
- ・住民参加の支え合いは、賃金が出てやりがいのある仕事として有償で長い間やっていただっている方もいる。配食・家事支援・サロンなど介護保険以外で地域の中で隙間を埋める活動が必要。人材もそれだけ必要。掃除、洗濯、片付けなど住み続けるには必要ということをやってきた。これからも住民支え合い活動を有償ボランティアとしてやっていきたい。

(事務局)

- ・これらの意見を介護保険事業計画の素案に取り入れていきたい。

(4) 次回の会議日程

1月17日(水)午後

3 閉 会